

『コロンバス』

2017年／アメリカ／コゴナダ監督作品

「空白」が雄弁に物語る人間ドラマ

会員 波床 有希子 (70期)



『コロンバス』
DVD：¥4,180 (税込)
©2016 BY JIN AND CASEY
LLC ALL RIGHTS RESERVED
ブロードウェイより発売中

コロンバスは、アメリカ合衆国インディアナ州にある人口4万人弱の小さな町であるが、モダニズム建築物が数多くあることで知られている。韓国系アメリカ人の中年男性ジンは、建築学者である父との確執から逃げるように韓国へと移住し、翻訳家として職を得ていたが、父が講演を行う予定だった旅先のコロンバスで倒れたとの一報を受け、アメリカに帰国することを余儀なくされる。そこで、この町で育ち、家庭の事情から大学進学を夢を半ば諦めて、図書館で臨時職員として勤務するケイシーと出会う。ジンとケイシーは、コロンバスに点在するモダニズム建築を訪ね歩きながら、心を通わせていく。

ケイシーは、モダニズム建築に造詣が深く、まるで観光ガイドのように、ひとつひとつの建物の由来を説明することができる。しかし、ジンは、ケイシーの説明を遮り、なぜケイシーがその建物に感動したのかを尋ねる。ケイシーは、ジンの問いかけにしばらく沈黙した後、何かを答える。この場面は、ジンとケイシーの交流の始まりを告げ、物語上重要な意味をもつのだが、観客には、ケイシーの答えは開示されない。

この映画では、「空白」が雄弁に物語る。登場人物の台詞は抑制され、背景となるモダニズム建築物の作り出す空間にも、白地のキャンパスのイメージが重なる。ジンの父に対する屈折した思いや、ケイシーが夢と母への義務感との狭間で葛藤する苦しみも、多くは語られない。また、ケイシーは、いまだきの若者であるにもかかわらず、電話は通話のみと言って憚らず、スマートフォンすら持たない。それぞれが翻訳家、図書館職員

という言葉による表現を生業にする職業に就いているのとは対照的に、語られない物語、言葉には表されない思いが、華やかな装飾を排斥した建築物の町を背景にゆっくりと紡がれていく。

いま私たちが生きる社会には、言葉や情報が満ち溢れており、ワンクリックで瞬時に世界中の人と繋がる高度な通信技術もあるにもかかわらず、人々は癒されざる孤独感を抱いている。

一方、ジンとケイシーは、SNSで四六時中繋がる代わりに、短い時間を共有し、より本質的なものを見つめながら、長年の友人のような関係を構築していく。現代社会の流れに逆行するかのような静謐なひととき。

人が人を思う時、それを言葉にすると薄っぺらで、嘘も入り混じるように感じることがある。この映画の監督コゴナダ氏は、小津安二郎氏の映画に多大な影響を受けたとのことであるが、たとえば小津映画の代表作『晩春』（1949年）のラストシーン、娘を嫁がせた父親が、帰宅後リンゴの皮を剥きながら、ひとりうなだれる場面からは、父親の思いが痛いほど伝わってくる。一人娘の幸せを願いながらも寂寥感に苛まれているのだと表現することもできるが、この父親の胸に去来する思いは、そんなありきたりな言葉よりも、もっと複雑なものだったのではないだろうか。

映画『コロンバス』は、ただ淡々と、ジンとケイシーの束の間の邂逅を切り取って観客に披露するだけである。それでもなお、観る者に深い余韻を残すのは、私たちが日常的に感じながらも心の隅に追いやっている渴望感に、そっと手を伸ばして触れてくるからのように思える。